

---

## ロンドン社交界とワイルド

山 田 勝

(神戸市外国語大学教授)

社交界の歴史は古い。古代からの戦勝祝賀や原始的儀礼もそれに属するであろう。だが、ヨーロッパ、特にイギリスの場合、社交界が洗練化し、エレガンスの光輝を放つようになったのは、19世紀に入ってからである。それには少なくとも三つの要因が考えられる。

第一は、フランス革命がロンドン都市貴族に危機感を与えたことだ。隣国フランスの王侯貴族は次々とギロチンにかけられ、あるいは海外逃亡を余儀なくされている。貴族はそれまでの生活では駄目なのだ。革命以前の貴族たちは、アニェイにまかせて、ギャンブルに興じ、コケットリーと酒の日々をおくり、民衆には傲慢であった。だが、それではいけないのだ。本来の騎士のあるべき姿に戻る必要がある。しかも、中世的バーバリズムを棄てたうえで。そうした意識革命がロンドン都市貴族に新しいライフスタイルを考案させることになった。

第二は、産業革命の先駆的役割を果たしたイギリスに、新しい階級が生まれた。中流階級（ブルジョワ。中流出現以前は、上流と庶民だけだった）の台頭である。彼らは、「労働」という貴族には思いもつかない手段によって、財政的に貴族に接近し、上まわるようにもなった。時には王侯といえども借金しなければならないほどの成金も出現している。貴族にとっては、中流の出現は脅威となった。

第三は、18世紀中期から人々の価値観を支配した啓蒙主義・理性主義の浸透である。この世界観がフランス革命の遠因ともなり、民主主義・平等主義を生むことになったのは言うまでもない。

簡単にいえば、貴族制が崩壊する様相を呈しはじめたのが、19世紀初頭のイギリスである。しかし、完全に崩壊したわけではない。時代はまだ過渡期なのだ。貴族性を発揮することによって、貴族のアイデンティティを示すことを知った彼らは、ブルジョワや庶民の真似のできないライフスタイル、すなわち「エレガンス」によって、「新しい力」に立ちむかいはじめた。

この時期にロンドンのファッションナブルな地域で、都市貴族たちがダンディズムにのめりこんだのも、そのためであろう。お洒落の仕度に2時間半から3時間もかけるという空無な姿は、過渡期の都市貴族の独自性追求の姿勢を明確に語るものである。女性についても、ほぼそれと同様のことが言えた。ブルジョワの催す舞踏会、ディナー・パーティとは

---

比較にならないほどの格式と品位を備えた社交界を形成することで、主催者（女性）の趣味の良さを顕示するようになった。

ロンドン社交界の様式美が完成されたのは、このような事情においてである。

一般にイギリス貴族の凋落が開始したのは、1880年代から、とされている。それにもかかわらず、腐敗するロンドン社交界に抵抗するものもいた。1889年のデヴンシャー公爵家の仮面舞踏会は、客は厳選され、エレガンスに徹したものであった。しかしこれは少数派であり、イギリス貴族といえども、時代の波に揺いでいたのである。

ワイルドの風俗喜劇は、そのような社会的風潮を見事に活写している。ワイルドの作品の読み方について、とやかく言うつもりはない。ただ、この時代の社交界のさまざまな仕組を知らなければ、空転的読み方になってしまう恐れがある。

この講演は、ワイルド作品だけでなく、外国文学を読むうえで、どうしても知っておかねばならない社交界の細部の報告であった。詳細は今年の秋ごろだろうか、『イギリス貴族のライフスタイル』（創元社刊）が出版されるので、それを参照いただければ幸甚です。

